

1995年度神学部・文学部・社会学部共催学術講演会

17世紀フランス文化における聖アウグスティヌス*

フィリップ・セリエ**

山上浩嗣*** 訳

森川甫**** 通訳



1995年3月
関西学院ランバス礼拝堂

1951年、パリで行われたフランス研究国際協会の第1回総会にて、ベリユル枢機卿研究の専門家であるジャン・ダジャン教授は、「17世紀は聖アウグスティヌスの世紀である」という、きわめて印象的だが、まだ議論の余地のある言葉を投げかけた。当初は反響もなかったこの主張は、1960年代以降、高名な学者たちによる再検討を数多く引き起こした。ラテン文学者ピエール・クルセル、ジュヌヴィエーヴ・ロディス＝レヴィスやアンリ・グイエのような哲学者、そして、ジャン・ラフォン、ジャン・メナール、ピエール・フォルス、アントニー・マッケンナのような文学研究者によって調査がなされたのである。

こうした研究によって、アウグスティヌス主義

の神学的・神秘的・哲学的側面がますます輝きを増すことになった。そしてそれらの研究は、ある巨大な大陸の発見へとつながった。すなわち、文学的アウグスティヌス主義の発見である。

本論で私が試みるのは、ここ30年来の研究成果を総合的に示すことである。その結果、本来は考慮すべき数多くの現象に触れることができないかもしれない。

まずは背景の確認から始めよう。ローマ・カトリック教会において、アウグスティヌスはつねに「最も偉大な教父」とみなされてきた。だが、急速に彼の全集に直接触れることが容易になるのは、印刷術が飛躍的な発展を迎えてからのことである。17世紀をはさんで、2つのすばらしい版本が発刊される。すなわち、パスカルも利用したルーヴァン版（1577年）と、今日でもまだ権威を失わない、サン＝モールのベネディクト会修道士たちによる版（1679～1700年）である。浩瀚な後者は、113の論攷、218の書簡、およそ500の説教からなる。プロテスタントによる改革運動が勃興するにおよびルターはアウグスティヌス派の僧侶であった—西方キリスト教が強くアウグスティヌス的な性格を帯びていることが明らかになった。以来、カトリックの信者のなかで、2つの傾向が対立することになる。一方は、当時創設直後であったイエズス会によって主導された傾向で、自由と恩寵の新しい神学を創造しようとする動

*キーワード：文学的アウグスティヌス主義，フランス・モラリスト，『告白』。

**Philippe SELLIER, パリ・ソルボンヌ大学名誉教授，文学（国家）博士。

***東京大学大学院総合文化研究科助手。

****関西学院大学社会学部教授。

き。他方は、バユス、ジャンセニウス、大アルノー、パスカルによる、極度にアウグスティヌス主義を押し進めようという傾向である。

そして、フランスにおいて最も知性の優れた人々を引きつけたのが、このアウグスティヌス主義的な流派であった。神学者ではベリユル、サン＝シラン、パスカル、ボシュエ、フェヌロン、哲学者ではデカルト（その一部の主張において）、マールブランシュ、そして文学者においては、古典主義作家で目立った人物の大部分が相当する。

こうした熱狂の全体を一望のもとに見渡すにはどうすればよいのか。アウグスティヌスの作品には、明るい側面と暗い側面の2つがある。本論の第1部と第2部では、この区別に基づいて論じていくことにしたい。だが、汲み尽くせぬほど多くのさまざまな現象のうち私が明らかにできるのは、いくつかの大筋だけにすぎないだろう。次に、最後の第3部では、2つの重要な著作、『告白¹⁾』と『パンセ』の対話を聞き取ることで、アウグスティヌスの大きな影響力を示すことにしよう。

*

聖アウグスティヌスについては、「悲観主義」がしばしば指摘される。だが実際のところ、彼の作品の大きな部分が、現実世界に対する熱烈な賛美からなっている。この点に、神秘的・哲学的・文学的な基本的主題が少なくとも5つ由来している。

数多くのアウグスティヌス的「上昇」が、われわれを宇宙の秩序が示す緊密な詩や、神の創造の驚嘆すべき美の存在に気づかせてくれる。ヒッポの司教はしばしば、世界に祝福の視線をふり向けたり、多くの被造物——水のなかを泳ぐ魚たち、天を翔る鳥たち——が幸福に群がっているさまを



ポール・ロワイヤル修道院におけるアウグスティヌスの精神的影響を表わしている。

ポール・ロワイヤル図書館所蔵。

前に歓喜の念を表している。地中海の人であるアウグスティヌスは、光が戯れ、事物に優しく降り注ぐさまに見とれた。「バロック期の」無数の詩人や作家たちが、こうした文章に啓発を受け、「白き移ろい」(《l'inconstance blanche》)、すなわち、宇宙の動きとその魅惑的な転変の主題にそって作品を創造した。たとえば、『自然の驚異について²⁾』(1621年)を書いたイエズス会士のビネ神父や、マルシアル・ド・ブリーヴ(『詩集・宗教作品集³⁾』、1653年)らが挙げられる。ジャン・ルーセ編『フランス・バロック詩集⁴⁾』(1961年)には、同様の色彩を帯びた詩が多数収められている。

創造主は善き神であり、被造物の魂のなかに幸福への欲望を刻み込んだ。「あらゆる人間は幸福になろうと求めている。このことに例外はない⁵⁾。』古典主義時代において、このアウグスティヌス的^{ユージェニウス}幸福至上主義について、さかんにエビ

1) *Confessionum*.

2) Père Binet, *Essai des merveilles de nature*.

3) Martial de Brives, *Œuvres poétiques et saintes*.

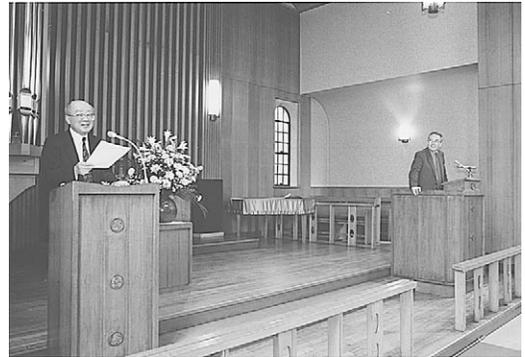
4) Jean Rousset éd., *L'Anthologie de la poésie baroque française*.

5) パスカル、『パンセ』、断章181-148。最初の数字はセリエ版(*Pensées*, Ph. Sellier éd., Paris, Bordas, 《Classiques Garnier》, 1995)の、続く数字はラフユマ版(*Pensées*, L. Lafuma éd., Paris, Luxembourg, 1951)の断章番号をそれぞれ示す。[訳注]『パンセ』からの引用の訳出に際しては、中公文庫版(前田陽一・由木康訳)を参考にした。ただし、表記や語句の一部を改変したところもある。

6) Jean Lafond, 《Augustinisme et épicurisme au XVII^e siècle》, dans la revue *XVII^e siècle*, 《Le siècle de saint

クロス主義との類似性が論われたり、反対に対立が強調されたりした。ジャン・ラフォンは「17世紀におけるアウグスティヌス主義とエピクロス主義」という内容豊かな論文⁶⁾のなかで、この問題に関する歴史を概観している。それによると、ガッサンディとその弟子たちはアウグスティヌス主義を標榜し、アウグスティヌス主義者ラ・ロシュフコーはエピクロス主義者と見なされ、マールブランシュとピエール・パウルはエピクロス主義者であるとの非難を受けていたという。「快樂」や「悦樂」を人間の情動の第一原理として称揚する態度は、パスカルにおいて次の有名なことばで表現されるにいたる。すなわち、「人が快樂を離れるのは、もっと大きなほかの快樂を見いだしたときだけである」、「真のキリスト者ほど幸福な者はいない」⁷⁾と。

アウグスティヌス思想における第3の明るい主題は、感覚的な事物から身を遠ざけ、自己自身を知ることで神を発見しようとするソクラテス的な命題である。ピエール・カーネは、『省察』の「我思うゆえに我あり」が、そうした命題にいかに関連しているかを示しえた。彼は、デカルトのいくつかの文章とアウグスティヌスの『三位一体論⁸⁾』との親近性を明らかにしている。このように主観性を尊重する点は、『告白』の魅力的な論述の起源に位置するものだ。この作品は、そのような豊かさや輝きを備えた最初の自伝である。そして、1人称の使用や、挫折に始まるが、次なる飛躍の可能性をはらんだ知性の紆余曲折の描写などから見て、『方法叙説』は——デカルトは否定するかもしれないが——『告白』の影響を十分に被っているのではないと思われる。メルセンヌが言ったように、一般的に「聖アウグスティヌスの教義に通暁すればするほど、デカルト



ランバス礼拝堂 1995年3月

哲学について理解するのが容易になるだろう⁹⁾。アウグスティヌスとデカルトの思想が真に編み込まれているのは、アルノーにおいて、フェヌロンにおいてである。その究極の形態は、マールブランシュが師事した人物のひとり、アンドレ・マルタン神父の『キリスト教哲学¹⁰⁾』(1667年)に見いだすことができる。そこでは、デカルト流の考察が、アウグスティヌスの引用集を構成するのに役立つ。

いうまでもなく、このような内面性への回帰は、別の2つの重要な主題をも喚起した。それは、内面の師との対話という主題と、魂の「城」の神秘的暗喩という主題である。『神のことばについて』という説教のなかで、ボシユエは、『教師論¹¹⁾』を自在に引用し、アウグスティヌスに依拠することの正当性を主張している。「耳に心地よい彼の文章の外面に加えて、内面に語りかける密かな声がある。《われらはみな心の内で聞き取る¹²⁾》 [...] 聖アウグスティヌスは言う。神のほかにわれらに教えてくださる方はいないことがわかるだろう、と。師はわれらの内にあるのだ¹³⁾。」神は精神の太陽である。いわば、われわ

Augustin», n° 135 (avril-juin, 1982).

7) 「ロアネーズ嬢への手紙」(Lettre à Mlle de Roannez, éd. Mesnard des *CEuvres complètes*, Paris, DDB, t. III, p. 1041); 『パンセ』, 断章389-357.

8) *De Trinitate*.

9) 「ヴォエティウスへの手紙」(Mersenne, *Lettre à Voetius*, A. T., III, 603, cité par P. Cahné, *XVII^e siècle*, 1982, p. 121).

10) Père André Martin, *Philosophia christiana*.

11) *De magistro*.

12) *Intus omnes auditores sumus*.

13) 1661年3月13日の説教.

れが永遠（たとえば数学的真理）へと顔を向けるやいなや、神に触れるのである。

神秘家たちは、アウグスティヌスが自己の内的世界を表象する暗喩に魅了された。すなわち、『告白』第10巻に見られる「広大な宮殿」「隠れた深奥」に。そこにおいて神が明らかに姿を現す—「わが心の奥のもっとも深いところよりもさらに深いところで¹⁴⁾」。「あなたは私の魂のもっとも深いところよりもなお奥におられる […] あなたは私の魂の最も高いところ、私の思考の最も崇高なところよりもなお高いところにおられるのだ¹⁵⁾。」人間は神の像である。神の恩寵は人間の心の内部に浸透し、その心を歎びで満たし、「魅了し」、そして—詩篇の一節によれば—「その悦びのほとばしりによって」陶然とさせるのである。恩寵の真の詩情は、最も強く啓示を受けた者たちによって生き生きと描き出されている。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、キリスト者の神は、愛と慰めとの神である。みずからとらえた人々の魂と心とを満たす神である。彼らに自分の惨めさと神の無限の憐れみとを内的に感知させる神である。彼らの魂の奥底で彼らと結びつき、彼らの魂を謙虚と歎びと信頼と愛とで満たし、彼らをして神以外の目的をもつことができないようにさせる神である¹⁶⁾。」

*

以上に見たように、アウグスティヌス全集の明るい側面に17世紀が注目したと言えるのは、とりわけ何人かのバロック作家、哲学者、神秘家たちの功績によるところが大きい。この傾向はとくに世紀前半において顕著であった。しかし、印象的

に思われるのは、古典主義時代の作家たちの大部分が、アウグスティヌスの世界観の暗い部分を強調しようとしたことである。

16世紀初頭以来、17世紀全体を通して—すなわちルターからフェヌロンまで—、神の恩寵と人間の自由意志についての論争が続けられたが、その激しい炎は、神学者たちに、ヒッポの司教の手になる反ペラギウス文書（412～430年）—すなわち、墮落した人間の腐敗、原罪という亀裂—の重要性を再認させる機縁となった。そしてまた、自由意志をより尊重する立場にあったギリシア教父たちに注目が集まることと比較的少なかったことによって、17世紀前半においては、聖アウグスティヌスの比類なき覇権が打ち立てられることになったのである。こうした現象に、次の2つの想念がさらに拍車をかける。それはまず、神は大きな異端が台頭するたびに、教会にカトリックの信仰を伝令する人物を遣わせ、この選ばれし者に啓示のようなものを享受させてきた、との確信である。たとえば、アリウス主義¹⁷⁾に対しては聖アタナシウスが現れ、キリスト受肉の神学についてはレオー一世¹⁸⁾が擁護した。異教ストア主義のキリスト教内での権化であるペラギウス主義に対しては、アウグスティヌスが現れてカトリックの真の思想を決定的に表明したのであり、彼のことは、歴史が続くかぎり教会を守る盾となり続けてくれるだろう、と考えられた。第2に、ジャンセニウスは、次のことを明らかにした。ミラノの回心者 [アウグスティヌスのこと] ははじめは半ペラギウス主義者だったのであり、転換期—つまりは回心—が訪れたのは396年、つまり、著作で言えば『種々の問題についてシンプリキウスに与う¹⁹⁾』から後（『告白』はこのすぐ後で

14) *intimior intimo meo*.

15) 『告白』、第3巻、第6章 (*Confessions*, III, 6, traduction Arnauld d'Andilly, Paris, Gallimard, <Folio>, 1993, p. 100).

16) 『パンセ』、断章690—449 (セリエ版 p. 491).

17) [訳注] 子の本性は父の本性と同質ではないとして、キリストの神性を否定したアリウスの説。325年のニケア公会議で否認。

18) [訳注] 400年頃～461年。ローマ教皇（在位440～461年）、聖人、教会博士。ペラギウスらの異端と争い、キリスト単性説を排し、第4回カルケドン公会議（451年）において、「唯一の神の御子イエス・キリストが、真の完全な神であるとともに真の完全な人間でもあること」を主張して教会の一致の土台と政治権力からの独立を強調、その後の中世教会の立場を確立した。

19) *De diversis quaestionibus ad Simplicianum*.



ランバス礼拝堂 1995年3月

ある)のことにすぎない。そして426年、あらたな啓示がアウグスティヌスに訪れ、神の恩寵についての彼の神学——よって人間についての論述も——がより精緻に彫琢されたのだ、と。これによって、『譴責と恩寵について²⁰⁾』(これが書かれたのはまさにその426年である)という恩寵について正式に論じられた論攷がきわめて重要な著作であると考えられるようになった。ポール＝ロワヤルは本書をアウグスティヌス全著作の粹であると見なし、若きアルノーはそれを1644年に翻訳したのであった。

言うまでもなく、アウグスティヌス思想がこのように進展していったことが発見されると、晩年の作品がより重要なものと見なされるようになってきた。彼の青年時代の未熟な小品を、内容も形式も整った反ペラギウス主義的作品群と比較することなど論外だと考えられるようになった。いわゆる「ジャンセニスム」は、おそらくこのような見解から発生してきたものにほかならない。さまざまな論攷のうちに見られる動揺にも、あてどのない逸脱にも、もはやとらわれることはない。それぞれの作品に正しい位置があったのだ。もはや聖アウグスティヌスは難解だと恐れる必要もない。神は大切な神学者を明晰かつ明快な教義の構築へと導き、その晩年の著作において十全なる光を放たせたのだ。このような考えを、ジャンセニウス、アルノー、パスカルはきわめてよく理解し、擁護した。しかしこのことから、カトリック

教会が経験した最も長きにわたる危機のひとつが到来することになる。この危機が引き起こした不安は拡散し、2大戦の間の時期にまで陰を落とし続けるのである。

こうして、17世紀全体を通して、より顕著な私たちでは1616年以降、まさにアウグスティヌスの「風土」とも言うべきものが存在し続ける。それは人間についての冷徹な観念の基盤であり、ホッブスやパスカルの(あるいはおそらく、16世紀にさかのぼって、マキャベリやグイチャルディーニの)政治理論を説明するのにも役立つだろう。リシュリューは、彼が庇護していた文筆家のひとり、司祭のルイ・マシオンに、マキャベリと聖アウグスティヌスの思想が一致していることを示す文書を書かせた(その原稿はフランス国立図書館に所蔵されている)。キリスト教的懐疑主義の一大発展(ピエール・ベールのような断固たるアウグスティヌス主義者はもちろんのこと、モンテーニュにおいてすらも——ただしモンテーニュは『神の国²¹⁾』の熱心な読者であった)は、この風土との関連において解き明かされるべきである。エピクロス主義の勃興についても同様である。新ストア主義の波——とくにイエズス会士とその弟子たち(デカルト、コルネイユ)らに見られる——については、アウグスティヌス主義的風土に対する反動の表れであったと言える。パスカルがうまく形容しているように、「いつもペラギウス主義者とカトリックとがいて、いつも戦いは絶えないだろう²²⁾」。

「フランスのモラリストたち」(モンテーニュからラ・ブリュイエールまで)の活躍は、フランスにおける聖アウグスティヌスの黄金時代と緊密な相関関係がある。ニーチェの明敏きわまりない考察によれば、モラリストたちは、プルタルコスによってはまだ惑わされていたにすぎなかった人類全体と偉大な人間たちと「ローマの美德」の「処女を奪った」のだ。しかし、こうした破壊作業にしても、『神の国』の内容を極端なかたちで強調したものにすぎない。本書においては、ローマの美德など粉々に粉砕されていたのだから。彼らモ

20) *De correptione et gratia*.

21) *De Civitate Dei*.

22) 『パンセ』、断章544-662.

ラリストたちは、アウグスティヌスとフロイト、『譴責と恩寵について』と『文化のなかの不安』とを連結する役割を果たしている。彼らは、人間の卑小さについての仮借のない考察によってだけでなく、無意識の存在についての確信（まだ確固たるものではないにせよ）によっても、精神分析の先駆けとなったのである。ラ・ロシュフコーの自己愛についての名文（『箴言集』、削除された箴言一）は、それを示す最も名高い文章のひとつとなっている。その文章は、最も偉大な教父〔アウグスティヌスのこと〕による、詩篇の1節「隠されたわが罪からわれを清めたまえ²³⁾」（詩篇19, 13）についての考察をもとにしているのである。

こうしてますますアウグスティヌス主義が力を増しつつあったが、その大きな力は、時の流れに乗って、次の2つのかたちで文化的産物に影響をおよぼした。すなわち、一方で、それはさまざまな作品のひとつひとつを部分的に染め上げ、他方で、まるでそれらの中心に置かれた光源のように、その時代の作品全体を照らしたのである。私はまず簡単に単純な「染め上げ」について語り、ついで「照らし出し」の作用について詳しく説明したい。

多くの現象がアウグスティヌス的色彩によって彩られている。たとえば、レトリックについての考察が挙げられる。これについては、マルク・フュマロリが『雄弁の時代²⁴⁾』（1979年）で主張し、17世紀末に交わされたアルノーとゴワボー・デュ・ボワの論争が証明している（1992年ドロックス社が再版）。また、ミラノの回心者のプラトン主義的思想は、虚構の文学全体（演劇や小説）の断罪を強化した。1660年代には、演劇をめぐる、文化の歴史全体のうちでおそらく最も激しい論争が巻き起こった。1694年、ポール＝ロワヤルの主導のもとに、もうひとりのアウグスティヌス主義者ボシュエの攻撃をもって、演劇論争は再燃する。そして、より目立たない現象としては、ア

ルノー・ダンディの翻訳（1649年）によって、『告白』を模範とする数多くの宗教的な自伝が書かれるにいたった。ポンティス（1676年）やユエの『回想録²⁵⁾』や、『自伝・女王クリスティーナの生涯、神に捧げる²⁶⁾』（1680年頃執筆）が挙げられる。アウグスティヌスの他の著作も、これに劣らぬ効力をおよぼした。『神の国』は歴史概念の形成に影響を与え、悲しくも有名な『ウインケンティウス宛て書簡²⁷⁾』（第93書簡）は、（ピエール・ベールらの）寛容をめぐる論争に対し、（信仰を拒む者への）暴力肯定という暗い理論を提供した。より広汎だが拡散した現象として、アウグスティヌスにおける人間の自律的能力への懐疑的な態度は、1580～1680年頃に見られた、ヨーロッパ西部周縁における悲劇の隆盛に影響をおよぼしているのではないと思われる。悲劇は、ときおり短期的にはあるが、考えられないような熱狂を呼び起こすきわめて興味深い文芸であるが、それが何らかの力とともに隆盛を見せるのは、人間の自由意志のありかたについての確信が大きな危機にさらされるような時期にほかならないと思われる。5世紀（ギリシア）、1580～1680年、19世紀末以来、そして（ストリンドベリからベケットにいたる）人物の自律性に対する懐疑の時期が、それに相当するだろう。コルネイユの『オイディプス王』（1659年）や、ラシーヌの『フェードル』（1677年）が、こうした不安を明らかに示している。

次に、暗いアウグスティヌス主義からもっと広汎に照らし出された現象に移ろう。そのうちの五つがここで考察するに値しよう。第1の現象は、批評家ジャン・ルーセによって「黒き移ろい」《l'inconstance noire》と名づけられた。さきほどは、アウグスティヌスが宇宙の幸福な祝福者であるようにわれわれには思えた。だが、その同じ人物には逆説的な二面性があり、宇宙のまったく別の相貌の前でも同じ程度に強く心を震わせている——死への道行き、移ろいゆく世界の不安定

23) Ad occultis meis munda me.

24) Marc Fumaroli, *L'Age de l'éloquence*.

25) Pontis, *Mémoires*; Huet, *Mémoires*.

26) *La Vie de la reine Christine par elle-même; dédiée à Dieu*.

27) *Epist. ad Vincentium*.

さ、人間の気まぐれなさま（モンテニユによって描かれたような）、すべてを滅ぼしてしまう時間、といったことがらに対して。詩篇136（ウルガータ版）「バビロンの流れのほとり」についてのすばらしい注解は、17世紀において絶えず人々の記憶に上った。『パンセ』の次の詩的な1節はそのことを示している。

バビロンの川は流れ、くだり、巻き込む。

ああ聖なるシオンの都よ、そこでは、すべてのものがとどまり、何ものもくずれることはない。[…]

その快樂がとどまるか流れるかを見よ。もし過ぎ去るならば、それはバビロンの川である²⁸⁾。

絵画の領域では、いかに陽気な現実のなかにも死が作用しているのを見て取るこのような悲痛な感情が、「むなしさ」という魅力的な主題を生みだした。ひとつは暗黙のむなしさ。それは次のような場合である。果実、花、奢侈、書物、楽器が豊富に描かれているのだが、それが幻想にすぎないものであることがささいな徴候によって暴き出される。たとえば、鏡に映る自分の姿にうっとりとする若い女性が——化粧箱などの古典的な付属品とともに描かれることで——、マグラダのマリアの痛切な生涯を密かに暗示する。そしてもうひとつは、明らかなむなしさ。しおれた花、傷んだ書物、弦の切れたリュート、それに——さらにあからさまな例として——、頭蓋骨や砂時計が描かれている場合である。こうした「むなしさ」の主題は文学にも現れている。[ボシュエの]『王弟妃アンリエット・ダングルテールに捧げた追悼演

説²⁹⁾』——かくも早く「しおれてしまった」この花[王弟妃のこと]は、文学上の「むなしさ」の見事な表現にほかならない。そして、[ラファイエット夫人の]『クレヴの奥方』は、暗黙のむなしさ（^{フェット・ギヤラント}「雅宴」の追憶や幻滅の作用）から明らかなむなしさ——世俗の欲望や活動から離れて隠居し、もはや「来世」のことしか考えない——への移行を示す例として読むことができる。主人公は舞踏会や遊戯を離れ、頭蓋骨と砂時計のもとへと赴くのだ。いかにも、この物語の中間あたりで、王アンリ2世が非業の死を逃げる悲劇的な馬上槍試合が、祝祭のなかに死を導入していた。

ボシュエやラファイエット夫人と同様、パスカルもこの生に対する「バロック的な」感情にとりつかれている。

われわれは、広漠たる中間に漕ぎいでているのであって、つねに定めなく漂い、一方の端から他方の端へと押しやられている。われわれが、どの極限に自分をつないで安定させようとしても、それは揺らめいて、われわれを離れてしまう。[…] 何ものもわれわれのためにとどまってはくれない。[…] われわれの理性は、つねに外観の定めなさによって欺かれている。何ものも有限を、それを取り囲み、しかもそれから逃れ去る2つの無限のあいだに固定することができないのである³⁰⁾。

こうした定めなさに感情に、典型的にアウグスティヌス的なもうひとつの感情がつけ加わる。それは不安である。『告白』の有名な冒頭が想起される。「あなたは、われらをあなたに向けて造られ[…]、われらの心はつねに混乱と不安でさざめき、あなたのうちに安らうまで安んじない³¹⁾。」文学や哲学においてこの不安の主題が扱

28) 『パンセ』、断章748-918。〔訳注〕この断章に関しては、セリエ教授の非常にすぐれた講演がある。訳者 広田昌義京都大学文学部教授。パスカル『パンセ』セミナー、於関西学院千刈セミナーハウス、1988年10月7日-8日、cf *Sengari* 関西学院千刈セミナーハウス開館10周年記念特別号、1990年3月。

29) Bossuet, *L'Oraison funèbre d'Henriette d'Angleterre*.

30) 『パンセ』、断章230-199。

31) *Fecisti nos ad Te, et inquietum est cor nostrum donec resquiescat in Te*。〔訳注〕ここでセリエ教授は、アルノー・ダンディの翻訳を引用している。《Vous nous avez créés pour Vous et […] notre cœur est toujours agité de trouble et d'inquiétude jusqu'à ce qu'il trouve son repos en Vous.》

32) Jean Deprun, *La Philosophie de l'inquiétude au XVIII^e siècle*.

われた例については、あまりにも数が多すぎて、1冊の本全体が捧げられてしかるべきである。ジャン・ドゥブラン著『18世紀における不安の哲学³²⁾』(1979年)のかなりの部分が17世紀にも言及している。

こうした豊かなことがらすべては、一世紀にわたるヨーロッパ文化、すなわちバロック時代(おおむね1560年から1660年まで)を特徴づける固有の感性に由来している。その感性は、対立する事象——生と死、幸福と不安など——の間に一致を見いだすのである。そして、私がここで引いた作家たち——パスカル、ボシユエ、ラファイエット夫人——は、古典主義時代の理想に支配された文化のさなかにいたるまで、「バロックの痕跡」の現実を証拠づけている。こうして、聖アウグスティヌスは、モンテーニュやドーヴィネが登場する前に、バロック文学の中心人物のひとりとして現れていたのである。

しかし一方、フランスにおける聖アウグスティヌスの黄金時代に関わる文化的現象の第2は、古典主義に属している。その現象とは、ポール・ベニシュのいわゆる「英雄の解体」(『偉大な世紀のモラル』、1948年³³⁾)のことである。百年ほどの間に、ストア主義の革新が、あらゆる種類の作品——モンテーニュの『エッセー』、コルネイユの悲劇、デカルトの『書簡集』、それに、イエズス会から生まれたさまざまな著作(ル・モワヌ神父の作品など)——を特徴づけた。フロンドの乱の直後に、文化的な大変動が生じる。人間の力に信頼を置くしばしば楽天的な文学に続いて、懐疑、見かけの虚偽性の告発、仮面の剥奪といった主題の大々的な流行が見られるのだ。こうした動きは、たいていの場合ポール＝ロワヤルの周辺で展開される。パスカル、ニコル、ラファイエット夫人、そしてとりわけラ・ロシュフコーがそのことを証拠づけている。ラ・ロシュフコーの『箴言集』は、アウグスティヌス神学の上に固有の奏奏

を編み込んでいるかのようだ。しかし、ピエール・フォルスの新著(『モリエールと物価³⁴⁾』、1994年)は、モリエールのような作家ですら、いかに時のアウグスティヌス主義から深い影響を受けているかということを示した。モリエールもまた仮面を剥ぎ取る者であった(『タルチュフ』、『ドン・ジュアン』において)が、より一般的に言って、アリストテレスの影響が濃いこの劇作家は、ギリシア哲学の節制の理想とはまったく相容れない欲望の理論を展開させている。彼の喜劇において、欲望はきわめて激しく、飽くことがなく、偏執狂的で、破壊的である。『タルチュフ』は自己愛のアレゴリーとして登場しているし、『ドン・ジュアン』の「私の欲望の激しさをとどめるものは何もない」(第1幕、第2場)はパスカルの文章を思わせる。『タルチュフ』の上演が禁じられているときに、ポール＝ロワヤルに近いある女性がモリエールに、彼女の私邸での上演を個人的に依頼したと聞いても、もはや驚くにはあたるまい。こうした英雄像の脱神話化の作用を、もうひとりの偉大な作家が示している。それはラシーヌである。その劇作品はもはやほとんどローマの美德に信を置いてはいない。そして、彼にあって「栄光」(これこそがコルネイユの登場人物たちを彩っていた)は、重荷へと成り下がってしまったのだ(たとえば、『ベレニス』において支配的なのは、すっかり打ちひしがれたストア主義の残滓である)。

この「英雄の解体」は、第3の現象と有機的に結びついている。その現象とは、美德という幻想の徹底的な告発である。人間存在(異教の人々はもちろんキリスト教徒さえも)における美德の現実についての広範な議論が、1640～1680年頃に絶頂を迎える。1640年に[ジャンセニウスの]『アウグスティヌス』と[コルネイユの]『ポリュククト』が発刊・上演され、1680年にラ・ロシュフコーが死去する。『箴言集』の巻頭句「われわれ

33) Paul Bénichou, *Morales du Grand Siècle*. [訳注] ポール・ベニシュ、『偉大な世紀のモラル——フランス古典主義文学における英雄的世界像とその解体』、朝倉剛・羽賀賢二訳、法政大学出版局、ユニベルシタス叢書、1993年。

34) Pierre Force, *Molière ou le Prix des choses*.

35) [訳注]『箴言集』からの引用の訳出にあたっては、岩波文庫版(二宮フサ訳)を参考にした。表記や語句の一部を改変したところもある。

の美德は、ほとんどの場合、偽装した悪徳にすぎない³⁵⁾」や、また別の1節「川が海のなかに吸いこまれるように、美德は私欲のなかに吸いこまれる」(箴言171)を思い起こそう。「書肆より読者へ」は、こうした分析とアウグスティヌス神学との関係をはっきりと強調している。そこでは、次のようなことばが用いられているのだ。すなわち、少数の選ばれた者たち以外の人間において、「罪によって墮落してしまった自然の嘆かわしい状態」における「見せかけの美德」から、「神がとりわけ深い恩寵によってお守りくださいますように」、と。すでに1678年、このモラリストの友人ジャック・エスプリが、『人間の美德の虚偽性について³⁶⁾』という示唆的な題名の書を発刊していた。ここでわれわれは再びモリエールに出会うことになる——そして、彼の劇作品についてのジャン・アヌイによる恐るべき評言に。それは次のようなものだ。「モリエールは動物=人間を昆虫のようにピンで留めた。そして彼は、繊細なピンセットでその昆虫の反応を探るのだ。ところが、昆虫=人間はひとつの反応しか示さない。それはいつも同じで、ほんの少し触れただけでも、そいつは細い足を震わせるばかりだ。それはつまり、利己主義^{エゴイズム}という反応である。[...] 一体、モリエールの登場人物で善人はいるだろうか？ 誰が人を愛するだろうか？ 自分以外の他人に施しを与えるような者がいるか？³⁷⁾」

アヌイはさらにつけ加えて言う。これらの喜劇に登場する恋人たちでさえ、「考えることといえれば——彼らのふるまいやことばを詳しく検討すればわかることだが——卓小なおのれの身のことや、みずからのつまらぬ欲望のことだけなのだ」、と。われわれはここで、第4の文化的現象を目の当たりにする。すなわち、ルイ14世の世紀の、恋愛の情念についての多様な考察である。当時、恋愛の情念は世俗の文学作品のなかにきわめてしばしば認められたのであった。聖アウグスティヌスは恋愛を官能へと還元し、よってそれを断罪した。12世紀にはトゥルバドゥールが現れ、恋愛経験のより繊細でより複雑な感情を歌ってい

た。17世紀はこの二つの伝統を同時に引き継いだ。この世紀はどのように位置づけられるだろうか。オノレ・デュルフェ、コルネイユ、それにルイ13世時代の大部分の小説家においてきわめて明白であった恋愛の称揚は、1660年以後姿を消すようになる。アウグスティヌスの影響は、次の2つの様態で表れてきた。ある思想家たちは、『告白』の著者の浴びせかける非難を、純粹かつ単純に受けつぎ(パスカル、ボシュエ)、ある者たちは人間の恋愛の豊かさと曖昧さをより鋭く見通した。これこそが、俗世の墮落と恋愛における偉大さの可能性の両方に深い理解を示す真のプレシオジテの優れた点であった。スキュアデー嬢からベルナル嬢へ、一連の応答(『恋愛の不幸³⁸⁾』、1687年)が与えられたのはまさにそのことを示しているのだし、われわれは『クレヴの奥方』(1678年)に、恋愛のありのままが断固として描かれているのを知っている。要するに、この墮落した世界に、「誠実で永遠に続く」愛など存在しない。よって、色恋の幻想などという人を欺く魅惑を脱し、「あの世」への希望を胸に世俗から身を隠したほうがよい、というわけだ。

残るは、アウグスティヌス主義から派生した第5の、(われわれにとって)最後の現象を概観することである。それは、集団的存在についての思想である。この思想は、二つの領域においてめざましい発展を見た。それは、選ばれた少人数の集団の生活についての思索——それは「^{オネットツテ}礼節」の理想という名で知られている——と、政治理論のことである。

世俗生活の領域において、「^{オネットツテ}礼節」——つまり生活のあらゆる活動において卓越する術——は、脆弱な知恵として現れる。というのも、自己愛にとらわれている人間は誰もが自分をすべての中心と考えるからだ。「^{オネットム}紳士」は、野心と欲望の衝突に身を委ねるのではなく、「快樂計算 \ll arithmétique des plaisirs \gg 」という知的な方法を行行使する。他者に気に入られるならば、自分が少しばかり不快な思いをしてもかまわない。そうすれば他者も自分と同じようにふるまってくれるだろう

36) Jacques Esprit, *La Fausseté des vertus humaines*.

37) Cité par P. Vandromme, *Jean Anouilh, un auteur et ses personnages*, Paris, La Table Ronde, 1965, pp. 141–142.

38) Mlle de Scudéry, *Les Malheurs de l'amour*.

から。反対に、もし身の回りの人々を軽蔑したり、彼らに対して傍若無人なふるまいをしたら、彼らは仕返しをするだろう、というのである。アウグスティヌス主義者たち（パスカル、ニコル）は、こうした世俗的なふるまいの曖昧さに期待を寄せた。彼らはその結果——しばしばキリスト者のふるまいに近い——を称賛したが、その本質的に自己中心的で墮落した心がまえを告発したのであった。

国家についての思索について述べるならば、何百万もの勝手気ままな「私」の衝突は、ときに虐殺や滅亡を引き起こすが、たいていの場合は、逆説的で不安定な秩序——利害の均衡、力関係——へと帰結した。これを、パスカルに即して、「邪欲の秩序≪*ordre de la concupiscence*≫」と名づけることができる。ここで、アウグスティヌス神学は経済理論の起源に位置している。パスカルやラ・ロシュフコーからマンドヴィル³⁹⁾（『蜂の寓話』、1705～1714年）、ついで、アダム・スミスやその有名な「神の見えざる手」の理論へと移行するのは見やすい道理である。個人的な利害が錯綜する混乱状態から、奇蹟——全体の幸福——が生じる。こうして、名士アウグスティヌスが経済の自由主義の聖なる守護神となった。

アウグスティヌス思想から派生した以上の告発——英雄の解体、美德の脱神話化、礼節への批判、現実の腐敗の認識に基づく政治理論——の大部分には、通底する要素がある。これらの現象を生みだすもととなった主要な典拠は、『神の国』第5巻である。この文章は、古代ローマの美德の幻想を破壊し、ローマの平和の血塗られた舞台裏を明らかにしたのであった。モンテーニュからラ・ロシュフコー、ラ・ブリュイエール、フェヌロンまで、本書の執拗な影響力はたやすく見いだすことができる。1655～1675年の20年間に、『神の国』は（スリジエ、ジリ、ロンベールによって）3度もフランス語に訳されたのであった。

以上のことから、一著全体をこの巨像とその17世紀への影響に捧げることが可能であると理解されるであろう。アウグスティヌスのほかの多くの著作も翻訳され、広く読まれた。かの知性にまさるセヴィニエ侯爵夫人が、その『書簡』の終わり部分で、『聖徒たちの予定について⁴⁰⁾』と『堅忍の恵みについて⁴¹⁾』を14度も引用していることを誰が信じようか。だが、これは事実である。この世俗の女性は、アウグスティヌスの『書簡集』や『説教集』をも熟読し、『告白』に何度も何度も親しんだのであった。

*

以上のような概観の終わりに、われわれのカメラを『告白』へと向け、短い間「大写し」にしてみよう。一般的なことがらを確認し、このアウグスティヌスの主著とパスカルの『パンセ』の間にある緊密な関係について少し説明することになる。

1649年、アルノー・ダンディによる『告白』の翻訳は大成功を収める。本書は数多くの回想録作者——ランスロ、ポンティス、アモン、アルノー神父、ユエ、フォンテーヌ——に影響を与えた。1680年頃、かのスウェーデン女王クリスティーナが、この形式に即して『自伝・女王クリスティーナの生涯、神に捧げる』を執筆する。ポール＝ロワヤルにおいても、『告白』は、アントワヌ・ルメートル、サングラン、ルメートル・ド・サシのように、何よりもまず霊的な導きを求める作家たちの枕頭の書となった。反対に、神学者たち（アルノーやニコル）にとっては、たいていの場合、『告白』の重要性は反ペラギウス文書のそれに劣っていた。これはもちろん、恩寵をめぐる論争が激しくなり、かつ切迫していたからである。

こうした分別はパスカルにおいて見受けられる

39) [訳注] ベルナル・マンドヴィル (Bernard MANDEVILLE) (1670～1733) : イギリスの医師、モラリスト。著書『蜂の寓話、または個人の悪徳は社会の利益』(1714年)において、伝統的なキリスト教的道徳は社会を単純にし、活力を失わせ、衰退させるのに対し、個人の欲望に根ざす悪徳こそが社会全体の利益になると説いた。

40) *De praedestinatione sanctorum*.

41) *De dono perseverantiae*.

42) Pierre Courcelle, *Les ≪Confessions≫ de saint Augustin dans la tradition littéraire*.

だろうか。ピエール・クルセルは、『文学的伝統における聖アウグスティヌスの「告白」⁴²⁾』（1963年）で、『パンセ』の作者はアウグスティヌス的な自伝をほとんど実践していないと考えている。この点でクルセルは重大な誤りを犯している。そしてこの誤りは、驚くべきことに、彼がアルノー・ダンディの翻訳を見落としていたことにいくぶん起因しているのだ。ところが、パスカルが最もしばしば用いていたのは——場合によってはラテン語の原文を参照することもあったが——この翻訳であった。

いまや、われわれの調査で、護教論者が『告白』から五つの根本的な主題と3つの戦略的な立場を借用していることを明らかにできるであろう。

真の神に向かういかなる道行きにおいても、その出発点においては、人間の本質的な特徴があらわになる。すなわち、移ろいゆくいかなるものにも決して満足しえない存在の不安、動揺、混乱である。

もし人間が神のために作られたのでなければ、なぜ神にあってのみ幸福なのだろうか。もし人間が神のために作られたのなら、なぜこんなに神に逆らっているのだろうか⁴³⁾。

この2つの問は、すでに見た『告白』の冒頭に依拠しているが、アルノー・ダンディによって付された、「真の幸福は、神においてしか見つからない真の喜びにある」という章題（第10巻、第22章）にも対応している。こうした幸福の探求こそが、人が戦争に行くなどのいかなる逆説的なふるまいをも説明してくれる。そしてこの戦争の例（断章181-148）は、『パンセ』がアウグスティヌスの前章（第10巻、21章）から借り受けたもので

ある。

パスカルに影響を与えた第2の中心的主題は、真理の発見は困難であるとの信念である。17世紀の多くの護教論者が、カプチン会修道士のジャン・ブーシェによる大げさな題名で言えば、『キリスト教の勝利⁴⁴⁾』（1628年）を喧伝した。だが、アウグスティヌスは反対に、真理への道がいかに険しく迷いやすいものであるかを身をもって体験していたのだ。自伝では彼が「真理を求めて苦しみもだえ⁴⁵⁾」（第3巻、第6章）、「あらゆるもののなかで漂流する⁴⁶⁾」（第5巻、第14章）さまが描かれていた。真理の困難な探求、神を隠す覆い（断章644-781）、探求をさまたげるわれわれの「怠惰」という『パンセ』のライトモチーフは、そこに起因しているのである。

この「怠惰」は、たまたま生じてくるものではない。これは、墮落した人間の本質的な要素として現れている。墮落した人間は、持続的に神へと向かうのではなく、何度もくりかえし神から注意をそらせるのである。こうした「神からの離反〈aversio a Deo〉」は、パスカルによる「気晴らし」の描写の起源となっている。パスカルは、ダンディの翻訳から、うさぎを追いかける犬とポーム競技^{ジュール・ド・ポーム}という、最も有名な例を引いた⁴⁷⁾。

第4と第5の主題——根本的に対立している——もまた、2つの作品を結びつけている。それは、人間の心の混沌というイメージと、しかしながら、人間の魂のたゆまぬ上昇、その不可侵な偉大さ⁴⁸⁾である。

2人が共通に選択した戦略はさらに重要である。その第一は、「プラトンから唯一の（神と人間との）仲介者へ」と名づけることができる。プラトン派の哲学者たちの著作を読むことで、アウグスティヌスは信仰へと向かった。護教論のプログラム「プラトンによってキリスト教へと備えること」（断章505-612）と、プラトン主義的な色

43) 『パンセ』、断章18-349。

44) Jean Boucher, *Les Triomphes de la religion chrétienne*.

45) laborans et aestuans inopia veri

46) inter omnia fluctuans

47) 『告白』、第10巻、第35章；同、第1巻、第9章。『パンセ』、断章168-136, 104-70, 169-137, 445-889。

48) たとえば『告白』、第2巻、第10章（「誰がこの混沌と混沌を解きほぐすことができるだろうか」と、『パンセ』、断章240-208（「この混沌とこの奇怪な混沌は […] われわれに向けて叫んでいる」））。

彩を帯びたその始まり部分「神の探求へと仕向けるための手紙」——洞窟の比喻や『バイドン』の状況（ソクラテスと同じく、われわれは、つねにわれわれを脅かす死の瞬間のことを考えている）への暗示をこめている——は、そのことによっている。しかし、プラトンを經由してもその効果は長続きしないし、傲慢へと向かわせかねない。そこで、唯一の仲介者キリストに頼ることが決定的に重要になる。パスカルが護教論第2部の序文「神を知ること」（およびその準備稿——そこには「[この方法で神を証明することの] 卓越性」という章も含まれている）のなかで展開しようとしたのは、『告白』第7巻（第8～21章）から啓発を受けたこのような手続きにはかならない。

第2の戦略は、護教論に与えようとした「配置」、すなわち構成と修辞上の結構である。パスカルはこれについて熟慮し、最もしばしば「順序」と呼んだ。ここで最高の模範となっているのは聖書、とくに『ヨブ記』、『伝道の書』、聖パウロ、そしてとりわけキリストである。それはたえざる逸脱の方法である。だがそれは見かけの逸脱であって、実はつねにただひとつの中心的主張——すなわち、キリストと神の国——を語っている。しかし、それぞれの要素を自律的なものに見せるこうした音楽的仕掛けは、断章329-298からも明らかなように、『告白』の模範にもしたがつている。この断章は、『告白』がどんなに冷え切った心をも「温かくする」純粋な愛の書であるとするアルノー・ダンディの考察（翻訳の序文）をふまえているのだ。

最後に、詳しく考察すれば、2人の作家に共通の第3の戦略的立場を明確にできると思われる。それは、護教論における「私」の逆説的な使用である。パスカルは、「私」を誇張して表明することの危険に対してきわめて慎重に警戒していたのだ。『パンセ』では、著者の主観的な感情がふと漏れだしたり、隠された本心がふと現れていると思われることがよくある。そこには、アウグスティヌス的な自伝の実践を思わせる抒情の高まりのようなものが見受けられるのだ。『パンセ』の「私」をほかの3つの「私」、すなわち『告白』の

「私」、『エッセー』の「私」、『方法叙説』の「私」との関係において分析してみるのには興味深いことであろう。

*

こうしてわれわれの短すぎるアマゾン探索は終わった。アマゾンとはすなわち、哲学的、神秘的、文学的アウグスティヌス主義のことだ。われわれはこの秘境を最近になって再発見した。その開拓はさまざまな種類の研究が試みている最中である。

フランスでは、非宗教を宗とする大学は、長らく教父学や中世思想の研究に傾くことを拒絶してきた。大学は2世紀末からルネサンスまでを一足飛びにしてきたのである。その結果、西欧宗教の最も偉大な天才、ヒッポのアウグスティヌスがヨーロッパ文化に果たしたためざましい役割について、まったく知られていないという事態が生じた。このような盲目は、他の領域にもまして文学において最も甚だしかった。

幸いにも、沈黙といってもよいようなありさまに続いて、熱狂が生じた。神学者、哲学者、文学研究者が、ただひとつの領域の囲いには収まりきれない研究を共同で行ったのだ。こうしてだんだんと明らかになってきたのは、フランスにおける聖アウグスティヌスの輝きが黄金時代を迎える17世紀において、（13世紀～15世紀の神学と哲学の結合の時期を経たあと）文学的神学ないし文学的哲学と名づけねばならないようなきわめて魅惑的な事柄が、比類のない革新を経たということである。その模範こそが、卓抜した思想家で散文の詩人たる、アウグスティヌスその人であったのだ。⁴⁹⁾

49) 本稿は、山上浩嗣が作成し、次いで、本誌、他の翻訳と表記の整合のため、森川 甫が加筆、修正した。

Saint Augustin dans la Culture du XVII^{ème} Siècle français*

Conférence académique organisée par

Faculté de la Théologie, des Lettres et de la Sociologie.

Chapelle de Lambuth, Kwansei Gakuin, mars 1995

Philippe SELLIER**

RÉSUMÉ

Depuis les années 1960, l'importance de saint Augustin dans la culture du XVII^{ème} siècle français est devenue de plus en plus manifeste. Or cette œuvre immense présente deux versants, l'un ensoleillé, l'autre sombre.

Côté soleil, l'évêque d'Hippone, poète du cosmos et de l'illumination intérieure, a inspiré la floraison des productions de l'«inconstance blanche» (J. Rousset) et la pensée de Malebranche. Il a suscité une célébration du bonheur qui l'a fait rapprocher de l'épicurisme. Il a appelé au retour à soi et favorisé l'essor de la mystique.

Si cet ensoleillement caractérise surtout la première moitié du siècle, l'assombrissement a marqué surtout la seconde. Il est sensible dans les théories politiques de Hobbes ou de Pascal ainsi que dans les poésies de l'«inconstance noire». ; il inspire le pessimisme des «moralistes français», en particulier de La Rochefoucauld. Les thèmes fondamentaux de l'inquiétude, de la «démolition du héros», de l'illusion des «vertus», de l'amour-propre et de l'intérêt se révèlent irradiés par la vision augustinienne du monde.

Un livre aussi fascinant que les *Confessions* est omniprésent dans les mémoires et dans maintes œuvres.

C'est une Amazonie qui a été ainsi redécouverte : l'augustinisme littéraire.

*Mots-clés : augustinisme littéraire, moralistes français, *Confessions*.

**professeur émérite à l'Université de Paris-Sorbonne, Docteur d'Etat, (Paris-Sorbonne)